

## ◇トイレ考

## 大槻伸次

古い話ではあるが日露戦争時、日本海大海戦の戦闘開始にあたり、東郷平八郎司令長官（元帥）は“皇国の興廢この一戦にあり、大小便ところかまわず”と云ったとか子どもの頃父から聞いたことがある。実際は「皇国の興廢この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」が本当らしいが、父がおかしく言い換えたのかは不明。しかし排便排尿はは食べることと裏腹の関係にあり、生きていくうえでの基本的な生理現象である。衛生的なトイレ（便所・厠）は、人間が人間らしく生きていくうえで必要不可欠なものである。そこで、トイレについていろいろな視点で考察してみた。

ヤフーニュース（産経新聞配信）を見ていたら、WHO（世界保健機関）12億人屋外で用足し「トイレ事情深刻」というニュースを報じていた。

世界で25億人が衛生的なトイレを使えず、うち12億人は屋外で用を足しているとする世界の衛生設備の現状に関する報告書を世界保健機関（WHO）と国連児童基金（ユニセフ）が纏めたという。

報告書は「発展途上国」では、不十分な衛生設備を原因とする感染症により、多くの子どもの命が奪われていると指摘、「このままでは『2015年までに、安全な衛生施設を継続的に利用できない人々の割合を半減する』との国連のミレニアム開発目標（MDGs）の達成は望めない」と警告し、途上国支援の拡大など強化策を求めている。

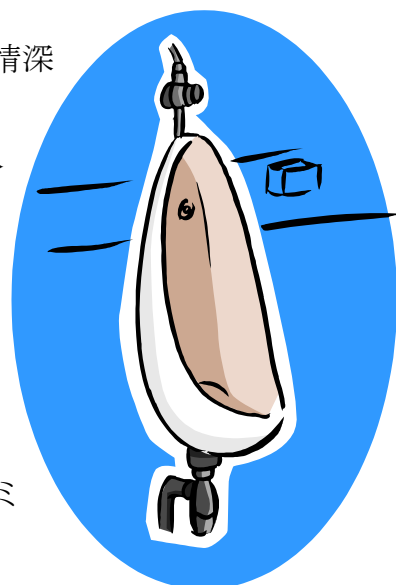
報告書によると2006年に衛生的なトイレを継続的に利用できている人は世界全体の62%である。利用できない人の数は減少傾向にあるものの、全人口の18%に当たる12億人は屋外で用を足すことを迫られているというのである。

インドやパキスタンなど南アジアでは特に状況が深刻で、全人口の半数近い48%が屋外で用を足しているとされた。

他にも、サハラ砂漠以南のアフリカ等の途上国を中心に普及が進んでおらず、現状でこの分野のMDGsを達成するには、7億人分のトイレが不足と見られる。

インドなど、ヒンズー教の国ではトイレは不浄であるから屋内には作らないという説もある。

不衛生なトイレとは浄化槽や洗浄設備がなく、人が日常生活の中で排泄物や汚水に接触する恐れがあるトイレの事で、下痢やコレラ、チフス、肝炎などの感染症の蔓延につながり、発展途上国では乳幼児の死亡率が高い原因の一つとされている。



## <日本のトイレ今昔>

昔の日本では、糞尿は豊かな稔りをもたらすものであったため長らく信仰の対象もあったようだ。私が子供の頃、母親が生まれた子どもを抱いて便所参りをした記憶がある。近所の民家のトイレを訪れるという「便所」参りの風習は、今も全国各地に残っているそうです。

仏教寺院において、主に真言宗や天台宗などの密教、禅宗寺院ではトイレは「東司(とうす)」と言うそうです。

京都の名刹、東福寺には室町期の木造建築で現存する最古のトイレ遺構があり、外から格子窓を覗くと地面に1メートル弱の間隔で壺が幾つも埋め込まれ、お互いの仕切りは無く明治初めまで使われていたという。

また不浄とする東司にお祀りする守護神を「烏瑟沙摩明王・うすさまみょうおう」という。

平成16年の早春、隣村にある常楽寺というお寺の境内に「烏瑟沙摩明王堂」というお堂ができた。そこで、何かと思って散歩の帰り立ち寄って見たらなんと小展示場を兼ねたお手洗いだっただけである。

その後、群馬菱の実会主催の北陸旅行に参加した折に立ち寄った富山の高岡山瑞龍寺（加賀二代藩主前田利長公の菩提を弔うため三代藩主利常公によつて建立された）には「烏瑟沙摩明王」が祀ってあった。この「烏瑟沙摩明王」は、左足を高く持ち上げ、不浄な振る舞いのあった「猪頭」の亥子神を縛り上げ、戒めている姿である。この「烏瑟沙摩明王」の御札を目より高い位置に貼り、お手洗いをきれいにすると、不浄がはらわれ病氣平癒、安産成就、子孫繁栄、家門繁栄するというのだ。 ■写真上・高岡山瑞龍寺の烏瑟沙摩明王像。



奈良平城京の時代は街路に水路があり、その水路を各戸の屋敷に引き込み水路に跨りトイレを済ませ水洗のように糞尿を流していたといわれている。そこで、糞尿の行く先、都の郊外は、悪臭が漂っていたという（異なる説もある）。時代は下って江戸時代、ハツアン、クマさんなど庶民の長屋では共同便所が当たり前で、床に穴が開いただけのしゃがんでするポツチャン便所だった。便器の下には素焼きの甕が埋めて在るだけの簡単なものだったのである。

百万人強の人口があった江戸の町ではトイレの糞尿は完全にリサイクルされ下肥として立派な商品であったという。また、糞尿は五段階にランク分けされていて美味しいものを食べていた大名屋敷の糞尿が最上品で、糞と尿が混合しているものは最下級品であったと云われている。糞の混じっていない尿ばかりの下肥は、お茶の木によいとされ「玉露」を収穫する茶の木には特にいい肥料とされ高額で引き取られたという。下肥の凡その値段は、現在の価値に換算して1トン当たり10万円で流通してい

たというからまさしく黄金であったのである。

長屋の大家は、店子からの家賃のほかに糞尿の販売権で収入を得ていたが、その糞尿（商品）の提供の見かえりに大家には野菜などの還元があったという。

また、近郊の新田開発などで下肥の値段が高騰すると、流しの汲み取り業者も現れたようだ。このように江戸時代では糞尿は立派な商品として流通し、公害をもたらすことなくリサイクルされた。まさしくエコロジー社会そのものだったのである。

そこで、江戸時代はパリなどのヨーロッパ諸国に比べて市街の糞公害は極力少なかったそうです。江戸期はもちろんのこと、明治以降も農業で化学肥料が逼迫していたので糞尿は貴重な肥料として消費された。非農家では農家に汲み取ってもらったり自家処理できない糞尿は農家や専門業者に依頼して汲み取ってもらっていた。

第2次大戦後は、第3国人となってしまった人達が手っ取り早くできる仕事として糞尿の汲み取り業（酒の密造をする者も居たようだが、取り締まられなかったとか）についた。ため屋ともいい、現在のようにバキュームポンプなどはないので、柄杓でため桶に汲んで専用の大型のリヤカーで運んだ。畑や田んぼにターメ（ため・糞尿のこと）ひきませんかと人糞尿のセールスに来た。

この汲み取りも時代が下るにつれて化学肥料の普及で農家でも使用しなくなった。そこで、家庭から汲み取ったターメの処分に困った業者は、無断で草むらや空き地などに不法投棄して糞公害が各地で多発した。

糞尿を、肥料とすることの最大の問題点は寄生虫問題であろう。そこで、当時の人達は、体内にギョウ虫、回虫、サナダ虫等（寄生虫）を飼っていたという事になる。

寄生虫が体内に寄生すると栄養分を吸い取られてしまうためすごく痩せてしまったようだ。ひどいときは肝臓や脳の中まで入り込んで、生命を脅かす存在になる場合があったという。そこで、学生の場合はマッチ箱に糞を入れて学校に提出し陽性の生徒は「ひまし油」や「海草エキス」などの虫下しを強制的に飲まされた。虫下しを飲んで1~2日もすると“ミミズ”ほどの大きさの回虫が肛門から垂れ下がるので紙で掴んで引っ張り出した。そのときの肛門付近の気持ち悪さといったら例えようがない。

私の祖母の実家は江戸時代（昭和30年代まで製造）から「腹病丸・ふくびょうがん・正露丸似の黒い丸薬」という寄生虫の予防薬を造っていた。そこで、明治時代、村の回虫検査でも家族誰一人として保虫者は居なかったと聞いている。

現在では糞尿を肥料として使うことは全くなかったなのでこの寄生虫の問題はほぼ解決したようだが、最近輸入野菜の普及で安心は出来ない状態になっていると聞いている。というのは、最近の韓国発のニュースによると、韓国が中国から輸入しているキムチに寄生虫の卵が見つかったと発表した。ところが、韓国産にも寄生虫が見つかったと中国側が発表、両国が応酬しあって貿易問題に発展した騒ぎになった。

我々が育った頃（昭和20年代）の家庭用トイレは汲み取り式が当たり前で、家によっては、便器の真下に陶器製のカメが埋めてあるだけという古典的なタイプもあった。単純に陶器製の甕が埋めてあるだけのものは、便器と便槽は一体物でないので、

空間が完全に遮断されていない。そこで例え仕切りがあっても他の部屋の床下まで臭気が漏れ出し、床下を伝わって家全体がトイレ臭で満たされてしまうこともあったようだ。また、直下に甕が埋めてあるだけの汲み取り式のトイレの欠点は大便秘も小便も一緒に溜まるので使用している間に小便のほうを上澄みとなる。こういう状態になると、大便秘のほうをするとぽちゃんといって小便が水滴となって時間差ではね返ってくる。そのとき、そのままじっと座っていると汚れた水滴が尻に付着してしまうので、大便秘をしたら直ちに立ち上がらないといけないのである。

我が家（昔の実家の内外のトイレ）のトイレは少し益しだったようだが、構造はコンクリート製で、便器に跨って大小便をすると大小便がコンクリート製の斜面を下り横の便槽に入る方式だった。コンクリート製のトイレは便器と便槽はコンクリート一体製なので便所の中は臭いけど臭気が他の部屋まで伝わりにくかったのは良かった。

この方式は、便槽が真下に無いので水滴のつきはこないが、斜面が汚れてくるとウンチ（大便秘）がなかなか滑り落ちないので、いつしか便器の真下にウンチが山盛りになる。冬はウンチが凍ってしまうのでコチコチになってさらに盛り上ってくる。こうなると、用を足していると尻につくようで鳥肌がたって気持ち悪くなるから、糞掻き棒？なるものでウンチを突き落とすしかないのである。さらに困ったことに、真夏になると蛆虫が多量に発生して“ウンチ”より蛆虫の方が多いとさえ思えるほどになる。

これを防ぐため、蛆殺し等の殺虫剤を投入するが、アンモニア臭と殺虫剤の匂いが混合し目が眩むほどになり涙は出るし、たまらない刺激臭であった。そこで、便所に入る前に深呼吸をして息を止めて入り、急いで用を足し息苦しくならないうちに終わるようにするとよかった。そこで、年少の弟妹たちは便所に入るのを嫌がり、堆肥場の周りなどに大小便をしてしまったが、多分青空トイレのほうがすごく快適だったのであろう。

便槽は 200 リットル程の容量があったようで、墜落防止に木の蓋がされていた。当時、我が家では乳をとるためヤギを飼っていた。ところが、生まれたばかりの子ヤギが小屋から逃げ出し蓋を蹴散らして便槽に墜落し糞だらけになってしまったことがあった。仕方なくザッと洗ってやったが、余りの臭さに母ヤギが近づかなかった。

トイレが満杯になると父が汲み取りをした。この時の父の顔を見ていると余りの臭さに決まって顔面が歪んでいた。汲み取りは下肥を便槽から「溜め柄杓」で汲み上げて、担い桶という木製の桶 2 個に七分目ぐらい入れる。七分目ぐらいに入れたら担いで揺れたときに波打ってこぼれないようにタメの上に稲藁を丸めてカバーした。そして、担い桶 2 個をバランスをとりながらエッサエッサと天秤棒で担いで畑まで持っていき、そのまま野菜等の作物に施すか、或いは畑の片隅に埋め込まれている腐敗槽に置いてきた。冬の或る日のこと、父は便槽が満杯になったのでいつものような手順でタメの汲み取り作業をしていた。汲み取り作業が終わって、畑に持って行くため担ぎ出した途端、突然タメ桶のタガが外れて、下肥があふれだし大変なことになってしまったことがあった。担い桶は木製なので、冬季は空気が乾燥しているため、桶の中に

水を入れておかないと木が縮んで「たが」が緩み桶が壊れてしまうことがあった。

そこで、今回壊れた原因は前回使用した後、汲んでおいた水が少しづつ漏れてしまったのだろうが、それを知らずに空のままで放置されていたようだ。そして、使用する直前になって慌てて水を入れたが、木の膨張が充分でなかったのである。父の話ではタメをこぼしたときはその匂いが余りにも強烈なので、鼻が曲がるほどで暫く飯が食えなかったといていた。

糞尿は、充分に腐敗してから作物にやるため、畑の片隅に腐敗槽が埋めてあり普通であれば担い桶で運んできたものは一旦ここに溜めておいた。ところが、運んできたのはいいが、腐敗層が満杯等でそのままのものを畑や水田の作物にやる場合があった。こんなとき、素足で田んぼに入ろうものなら、足に肥やしガセが出来て痒くて仕方なかった。畑の場合、糞尿がまだ腐っていないので黄金そのものが転がっているときがあった。その当時は、トイレトーパーなんて洒落たものはなかったので新聞紙や雑誌を常用していた。そのため畑に下肥を撒くと、変色した紙は分解しないので印刷してある字が読めた。冬であれば北風に乗ってあちこちにひらひらと飛んでいった。

また、畑の隅に埋められた腐敗槽の糞尿は、冬になると太陽と北風に晒されて、表面が黒くカリカリになる。更に北風によって運ばれてきた土に埋まって跡形もなく消えてしまう。ところが、畑で遊びに夢中になった子供達が墜落する事故が多発した。

或る時、冬の真ただ中、近所の女の子が腐敗槽に墜落したので母親に連絡したら、怒鳴られながら冷たい川に連れて行かれ、ガタガタ震えながら洗われていた。近所の子供たちは土手の上で、明日は我が身も知らず興味津々で見学していた。

現在の日本では、下水道や浄化槽が普及してから殆んど家庭から“ぽっちゃん便所”と謂れ不評をかった汲み取り式がなくなった。たとえ汲み取り式であっても工業製品であるプラスチック製の便槽（我が家の最初のトイレ）であれば、臭気があがってこない工夫がされていて、さらに電動の臭気抜きがついて匂いを押さえる構造に改良されているからひどい臭気に悩まされることはなかった。また、上澄みの小便による時間差の跳ね返りがくることも無かった。

我が家では、昭和 45 年に持ち家を建てたが、その当時は汲み取り式が主流だったので何のためらいも無く汲み取り式にした。ところが子どもが成長するにつれてぽっちゃん便所は嫌だと不評だった。そこで、我が家では平成元年の増築を機会に洋式スタイルの便器にして浄化槽処理式の水洗トイレに変身した。そこで、臭い汚い便所から開放され爽やかトイレに変身している。更に、平成 30 年最新式のトイレにリフォームしたら大の匂いすら全く感じなくなった。ところが、水洗式に代わるにつれて、用足スタイルも和式から洋式に変身し、男性用の小便器が消え、小用は洋式便器に座ってするというスタイルが多くなった。小便器消滅のそもそもの要因は、「洋式便器」の普及が大きく影響しているといわれている。

トイレ研究家の平田純一さん（1933 年生まれ／現 86 歳／元 TOTO 社員）によると旧日本住宅公団は、団地のトイレに小便器をつけず、和式大便器だけにした。家族四

人の 2DK で優先されたのはリビングや寝室などであった。その分、水周りにしわ寄せがいったというのである。和式大便器は工事に手間がかかることや、男性が立ってすると便器の外側へのとび散りが多いため公団は 1960 年に全国一律で洋式便器を導入した。やがて、民間のアパートや一戸建てにも広がっていったというのだ。洋式トイレが本格的に普及したのは 1970 年代以降といわれている。

男性座り派の増加は下着も替えつつあり、「窓なし下着」着用派が増えているという。イスラム教徒の男性はしゃがんで用を足すというが、日本では立ちションが当たり前である。もともと男性は、体の構造から立ち姿で用足しをするのに適しているといわれているので残尿に注意すべきだろう。

## <諸外国のトイレ今昔>

### ▼東ローマ帝国

ヨーロッパの古代のトイレ事情は、現在のトルコの地にあった東ローマ帝国（ビザンチン帝国）時代の古代都市エフェソスの遺跡（トルコを旅した折、見学した）には古代の公衆トイレ跡が残されていた。

平たく長い石造りのベンチに等間隔で穴が開けられ用足しは大勢の人がそこに尻を乗せて座ってするというものである。トイレの下は堀になっていて何時も水が流れ水洗式であったようだ。

古代ローマ帝国の遺跡を見ると、ほぼこんな様式のトイレを使用していたようだ。

■写真上・トルコ古代都市エフェソス遺跡。

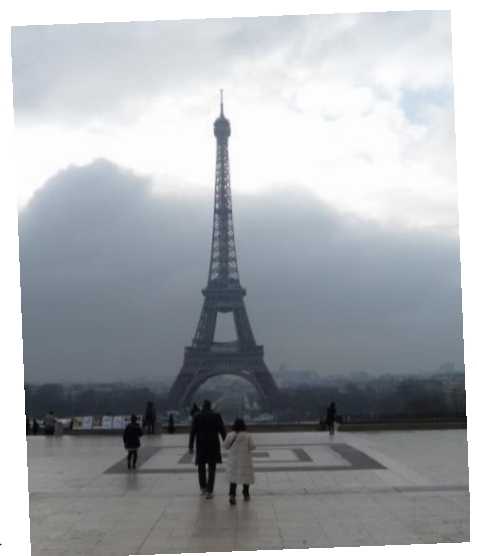
■写真下・エフェソス遺跡の水洗公衆トイレ(ウィキペディアより)。



### ▼フランス

18 世紀フランスのパリは無秩序な市街の発達により道路は迷路のように狭く、上下水道などの社会資本が伴わず暗く陰気な街だった。トイレの無いビルの住民たちは、壺をトイレ代わりにしていたという。そこで、壺が満杯になると糞尿を窓から街路に投げ捨てた。そこで、パリの町は糞尿の匂いが街中に立ち込め、目が眩むようであったとか。

このような事情で、パリでは淑女は道路の糞尿を踏まないようにということで履物がハイヒールになったといわれている。そして、男女が一緒に歩くときは、女性が男性の外側を歩き、女性が糞尿をかけ



られないようにと男性が守ってあげたというのである。このころ登場したナポレオン三世は、そんなパリの街の現状を憂慮して市街地の改革に着手し現在のパリの原形を作ったと云われている。その延長線上に 1889 年ナポレオン三世の治世にパリ万博（1885 年）が開かれエッフェル塔（写真）が建設されたのである。

### ▼17～18 世紀のスコットランド（エディンバラ）

スコットランドの首都エディンバラの街は 16 世紀のイングランドの侵略時に築かれた防壁に囲まれており、防壁の中は 140 エーカー（0.56 平方キロ）ほどの土地しかなかった。そこで 17～18 世紀限られた土地に多くの人が入植してきたため人口が急増し、9～15 階というヨーロッパ初の高層建築が建てられたという。



ところが、この高層建築には排水設備が無かったため、通行人に“ガーディール”といって汚水を窓から通りに投げ捨てていたというから、間違っ汚水をひっ掛けられた人がいたそうだ。ガーディールというのは水に気をつけてというフランス語からきた言葉だそうです。■写真・現在のエディンバラ旧市街(ウィキペディアより)。

### ▼中国の廁事情

① 最近の中国の都市開発はすさまじく、王府井などは景観として日本の銀座を超えている。そこで、当然都市部の便所の多くは西洋式の個室水洗になっている。ところが、国際化とは縁の無い地方都市や田舎はいまだに開放便所のような。廁にはドアも仕切りも無く全面オープンだという。もちろん大便のほうである。中級の都市でも町中の有料便所「廁」はきっぱり開放式が多かった。入り口のところに番人がいて 2 角（3 円）位取られるという。

有料でも汲み取り式が多く、たとえ水洗式になっていても開放式。中国人は長年開放式でやっているからあまり恥ずかしいと思わないのだろう。

チベット自治区などは、高い位置に便所があり周囲はせいぜい 20 センチぐらいの仕切りで囲まれている程度だからその便所に立つと通りを行く人々が丸見えだというのだ。

どうして高いところにあるかといえば堆積したクソの山を掻き出し易いからだそうだ。大昔の実家でも掻き落としたことはあるが、チベットでは今でもやっているそうだ。広大な中国のこと地域にも拠るが、昔は個室便所だったそうだ。それが人民公社化の時代になってみな共用ということになったらしい。

個人の便所は贅沢だから取り壊され、みんな町の公衆便所で用便をするように統一されていったのだという。けれど共用の便所だと、国家や体制に対する不満や抗議の落書きが密室の庶民伝達という手段で噴出してきたので、そういう落書きが出来ないようにドアが外されたとか云われている。

（中公新書・西条 正著参照）

② サンデー毎日 2007年9月30日号椎名誠著によると、椎名氏が初めて中国に行ったのは国交正常化して間もない頃だったというが1ヶ月の旅はホテルと列車以外は全て開放便所だったとか。しかも地方の公衆便所は絶望的に臭くて汚かった。夏など、便所全体に蛆虫がうごめいているところもあり、頭の中で絶叫なしにはしゃがむ事が出来なかったという。中国西北の田舎には「野外大便小便逮捕罰金三十元」と塀に赤く大きく書かれており、公衆厠の周りには大便が沢山転がっていたそうだ。

ここまできたならば中に入ってやればと思うのはシロウト考えで、中は阿鼻叫喚。鼻三重曲がりの大修羅場になっていた。中国人は公衆厠からたいていズボンをずり上げながら出てくる。女便所もそうらしい。下手をするとまだ、けつが丸出しだったりする。最初のころ、何でそんなに急ぐのだろうと不思議に思ったが、臭すぎるから一刻も早くそこから出たいのだそうだ。

### ▼ところかまわず子どもに排泄させる中国人

2013年3月1日、米メディアのkotaku.comは「中国の子どもはなぜ公衆の面前で排泄するのか?」と題した記事を掲載した。2日付けで環球網が伝えた。

中国のネット上に、毎週のように公衆の面前で排泄する子どもの写真が公開されている。当然の如く、その子どもの両親や祖父母に対する非難が殺到しているが、こうした行為はなぜなくなるのか?多くの場合は子どもだが、大人の排泄行為を目撃することも。中国の農村部では「青空トイレ・屋根の無いトイレのこと」が今でも多い。

北京などの大都市の公衆トイレは、北京五輪を機に大きく改善したが、その他の都市の公衆トイレは惨憺たる状況だ。

中国では昔から公衆トイレの数が圧倒的に足りない。しかも紙おむつは普及していない。トイレが見つからなければ、親はその場で子どもに排便・排尿させるしかないのである。子どもに股割れパンツ（すぐに排泄できるよう、股の部分が初めから開いているパンツ。日本でも昔のこと、股割れパンツ使われていたのを記憶している）を履かせているのはそのためだそうだ。

中国の中産階級には紙おむつを買う経済能力はあるのだが、実際には股割れパンツをはかせている。もし面倒を見ているのが親でなく、祖父母たちならば、ところかまわず子どもに排泄させるのは当然のこと。なぜなら彼らがそうして育てられたからだ。「何処でもトイレ」が当たり前の子どもは、大人になっても人前での排泄が平気でできる。つまり、親の教育が問題なのである。

### ▼テレビや冷蔵庫があってもトイレが無い経済大国インドの現実

インドの首都ニューデリーのスラム街に住む人々は毎朝、線路脇に集まり、ほとんどの人が隠れて用を足すそうだ。水入りボトルを手にやってきて、身を隠そうとする人もいれば、余り気にしない人もいるという。通過する列車の轟音や警笛に動じる人は少ない。これを40年来の朝の日課とする商店主のムクヘシュさんにとっても、恥ずかしいことだが他に方法がないのだそうだ。



世界保健機関（WHO）によると、推定で 6 億 2,500 万人のインド人が屋内トイレを利用できずにいる。インド政府の国勢調査によると、インド人の 52.2%は携帯電話を持っているが、その一方で、トイレ付の家に住んでいるのは 46.9%と半分を下回る。

農村開発相兼飲料水衛生相のジャイラム・ラメシュ氏は、インドのライフラインとも呼ばれる大規模な鉄道網は、「世界最大の屋外トイレ」であり、屋外で排便する世界の人口の 60%近くはインド人だと嘆く。24 歳の女性、カライセルビさんは、よりよい生活を求めてインド南部の村を離れ、1 年前にニューデリーにやってきたが、この国の首都で、最も基本的な設備を探すのに苦労するとは思ってもよらなかったという。

男女が隣り合って用を足すことは、カライセルビさんにとって本当に恥ずかしく苦痛である為、午前 4 時以前と午後 7~8 時以降の暗い時間にしか用を足さないという。ムクヘシュさんもカライセルビさんも、大型スタジアムや有名な最高級ホテルから数分の距離にある、3,000 人規模の典型的なインドのスラム街に住んでいる。

隣近所では、1 部屋の小さい部屋に、衛星テレビや冷蔵庫、エアコンなどの最新機器が詰め込まれているが、トイレがある家は 1 件も無いそうだ。

カライセルさんがトイレを設置したくても不可能だ。彼女が住む地区には下水施設が無いのだから。(2012.09.30 CNN News より)

## <海外旅行中トイレで感じたこと>

海外旅行で、不安を感じたのは第一にトイレだろう。街歩きをされていて尿意を催してもまずトイレが見つからないのが普通だったのである。日本では駅や公園に行けば大体無料の公衆トイレが必ずある。ところが、海外では公衆トイレがきわめて少なく、有料トイレを含めても探すのに苦労した。(2020 年現在 26 ヶ国訪問し、主にヨーロッパ諸国とバルカン。他にトルコ・エジプト・モロッコ・南米ペルー・台湾・北京・韓国・タイ・マレーシア・シンガポール・オーストラリア、他に乗り継ぎ空港等)

### ▼トイレ探しに苦労した

エジプト観光の帰り乗り継ぎの関係でイタリアのローマ（ローマ観光は 2 度目）に立ち寄った際、コロッセオの観光があった。その観光中尿意をもよおしたので、バスを降りる前に添乗員さんからトイレの大体の場所を聞いてはいたが、なんとしても見つからなかった。そこで、駅などの公共施設に出向き片言の英語で尋ねたところ、ものすごい剣幕で相手にしてくれなかった。そこで、たまたまそこに居合わせた日本人観光客の情報によると、料金を払ってコロッセオの中に入場観光すればトイレがあると聞いた。ところが、集合時間までの時間的制約のため我慢した。そんなサービスの悪さに楽しいはずの観光旅行が台無しになってしまった。旧ユーゴスラヴィアのスロベニア、クロアチア、ボスニアヘルツェゴビナとオーストリアの 4 カ国巡りの旅で、スロベニアの首都ルブリャナの観光中、私を含めて数人が尿意をもよおしたが、何としても見つからないので、無理を言って喫茶店のトイレを借りることになった。現地では言葉がわからないからの場所を聞くことも出来ない。

また、フランス旅行の際モナコ公国に立ち寄ったが、王宮前広場でフリータイムとなったが、トイレが見つからず別のところに移動したとき添乗員さんに探してもらったこともあった。どの国を観光しても、なんとか探してあげようという親切心があまり感じられない。そこでトイレを含めて、日本という国の公共サービスの充実振りには改めて驚くばかりである。



南米のペルーに行ったときの事、高山病（4,100m の峠越えもある）の予防には水分を多くとること、マカ茶を多めに摂ると良いと強く勧められた。そこで、云われた通り調子に乗って（酸欠で頭痛があった）マチュピチュに行く朝のホテルの朝食後に、マカ茶と水をたっぷりとった。ところが、クスコを出発し寒いアンデス山中を



バスに揺られていたら急に尿意をもよおしてしまった。如何せん山の中でトイレなんかある筈もない（バスもトイレ無し）。残念ながら携帯トイレも持っておらず、どうにもならないのでバスを止めていただくようお願いした。幸い快く聞き入れてくれて、放尿と相成ったがとんだ失敗でに恥ずかしい限りだった。ところが、甲府から参加したという旅の仲間（女性）が、冷えたんだらうとホッカイロを出してくれたのには感謝だった。旅は道連れというが、まさにこのことだったのである。旅の思い出として早朝のアンデス山中の貴重な放尿体験であった。

旅行中のトイレ回数は、現地の天候の良し悪し、水分の摂取量、体調の変化などにより増減する。ましてや日本人は欧米人に比べると膀胱のサイズが小さいのでトイレが近いといわれている。我々のような年配者は尚更である。

観光バスがトイレタイムなどで停車するのは2時間から2時間半が普通の間隔であるからそのつもりで飲み物などを取らないと大変なことになる。

国内の旅行であればどこかで立ちション便なんてことも可能なのだろうが海外では立ちション便なんて見たことが無いし、そう簡単にはいかない。立地にもよるだろうが、許可無く立ちションなんかしたら多分罰になるだろう。

欧州旅行で、長距離移動のバスは必ずトイレ付だったが、最近は臭いが出るという理由で不評らしく使用を中止しているバスが多かった。そこで、外国旅行の場合特にドライブインやお土産店（無料）などに立ち寄ったらこまめにお手洗いを済ませておくのが肝要である。また、やむなく有料公衆トイレを利用する場合は、小銭を用意しておかないと困る。トイレはどこであれ毎日お世話になる大切な場所であるので安心と、快適な場所でありたいものだ。トイレ使用料は訪問国によって異なるがおおよそヨーロッパ諸国・20～50セント。トルコでは百万トルコリラ（当時の単位は大きかったが、日本円で50～100円位）。ミネラルウォーターは1リットル=おおよそ1ユーロ/枕銭約1ユーロである。■写真上・モナコ公国王宮前広場。■写真下・ペルー・ララヤ峠にて（クスコからララヤ峠（4,100m）を越えてプーノへ向かう）

### ▼トイレが不潔

欧州においてはどこの国のトイレをかりても使用に耐えぬほど臭くて汚いトイレは無かったが、アフリカなどの発展途上国のトイレはお世辞にもよいとは言えない。中でも、妻がモロッコの旧跡（アイト・ヴェン・ハッドゥ）を観光中トイレを借りたが、言葉にできない程のトイレだったと云っていた。



汚さで忘れられないのはエジプト観光旅行中、夜行列車でアスワンハイダムのあるアスワンから首都カイロ迄の夜行寝台列車に乗車した。その翌日、カイロ、アレキサンドリア間を列車で往復したが、とにかく列車のトイレの汚さにびっくり仰天した。特に前日の夜行列車の洋式トイレの便器の中は、汚物が流されてなくウンチとトイレットペーパーの大山。便座は汚く、到底座わって用足しが出来る状態でないので、靴のまま洋式トイレの上に上がり、和式トイレのスタイルで用を足したが、とにかく一苦労だった。2度目の用足しのときは、もっとましなトイレが無いかと探したが何処も同じように汚かった。そして翌日の昼間、地中海に面したアレキサンドリアへ行ったが、昨日よりは益しな特別列車で往復したが、夜行列車ほど汚れていなかったが、便座に座るのはかなり躊躇した。（便座に敷くペーパーは備えてあったが）用足し後、便器の中を覗くと汚物は線路に垂れ流され、枕木の姿がぱらぱらと去っていくのが丸見えだった。■写真・エジプトのアスワンハイダムのあるアスワンからカイロへ向かうとき、乗車した夜行寝台列車を引っ張っていたジーゼル機関車。

### ▼トイレの使い勝手が悪い

ヨーロッパ大陸諸国では尿瓶のような小さな小便器が、高いところに取り付けられて、日本人仕様でないため小柄な日本人には非常に使い勝手が悪かった。閉口したのは、自分は背丈が167センチなので小柄なほうで無いと思っていたが、欧州（西欧や東欧も変わらない）やトルコでは柱に掴まって背伸びして、さらに爪先立ちしないと小便の用足しができないほどだった。まるで子供が大人の小便器で用足しをしているようだった。用足しが終わった後に、自分の持ち物に小便の跳ね返りが無かったかと心配になった。そこで、身長の高いツアー仲間はずっと小便器を敬遠して、個室の座り便所を使用していた。便器自体は陶器製が普通に見られたが、イギリスでは小便器も大便器もステンレス製のものが多かった。ホテルの洋式便座は重くて大きかったが、使用に際しては特に問題なかったが、どこも電熱便座でないので凄く冷たかった。

トルコとボスニアヘルツェゴビナの大便器は、和式のようにしゃがんでするタイプであったが、形状が瓢箪のように真ん中がくびれていて金隠しが無いので前後がどちらかわからなかった。妻が乗り継ぎ空港であるウズベキスタンの、タシケント空港内の有料トイレに入り内側から施錠したが、出るときに錠が開かないと焦り冷や汗をかいたと云っていた。原因は、錠の具合が悪かったので本人があかないと慌てたためら

しいが、不案内なところでは施設もままならなかったようだ。また、タシケント空港のトイレトペーパーは新聞紙のように黒くてバリバリで使い勝手が悪かった。

ペルーでは公共下水道施設が貧弱なので、何処でも用便後のトイレトペーパーを便器に流さないで備え付けのゴミ箱に捨てるように強く云われた。

### ▼北京のトイレで感じた事

2009年6月、中国の北京旅行に行ってきたが、その観光中、何かと話題の多い中国のトイレ（厠）についても注意深く観察してみたが、どこも汚れが無くピッカピカで無料（有料というトイレに出会わなかった）で使用できるので困ることもなかった。というのは、何処のトイレも清掃人が常駐し、国の威信にかけて管理している様子が伺えた。観光中、北京に何度も来ているというツアー仲間と知り合いになったが、彼が言うには今年の北京オリンピックを契機に北京の街は一変したと云っていた。たしかに、北京の街をアチコチ歩いたり観光バスの車窓から見る風景はどれも新しくて人工的だった。多分、今年の北京オリンピックで国を挙げての政策によるものだったと理解した。そこで、私がイメージしていた昔の中国を忍ばせるような風景はほとんど見られず、期待外れに終わった。

### <学校等公共の場でのトイレ事情>

自分が通った頃の小学校のトイレは、小の方は、びちゃびちゃな踏み台の上に上がってコンクリートの壁に向かってするという単純なもので、尿が流れる溝は黄土色の堆積物がたまっていた。大の方は便器の下部を覗くと真っ暗で目が回るような臭気もろに上がってきた。便槽は、大型のプールのように大きく下を覗くと真っ暗で底なし沼のようで、お化けが出てきそうで不気味だった。そこで便槽の上に便器が置いてあるという感じで、大のほうをするとポツチャンと小のおつりがきた。

こんなトイレ事情であったので小学生の頃は学校のトイレに入るのがすごく嫌だった。そこで、トイレは臭くて怖いところという意識が染み付いて学校の帰り道では田畑に寄り道し野糞をやらかした。用足し後は、草の葉っぱで尻を拭いた。仲間が「四方見てウンと息張る野糞かな！」なんて川柳にして詠んでいたのを思い出す。

現在のトイレでは用足しが終わるとあっという間に水で流してくれるのでその臭いさえ全く感じられず隔世の感である。

現在の学校では、小学生たちは学校に行って大便の用足しにトイレに入ると仲間馬鹿にされるので学校では決して用を足さなくなってしまうという。

困った学校では、その対策として男子の小便器を取っ払って、女子トイレとおなじに擬音を出す装置を導入し完全個室化しているという。

これならば、トイレに入っても大をしたのか小をしたかわからないので安心して用を足せるという具合である。

またオフィスでは覗き見対策として仕切り壁を高層化し駅のトイレは汚れないよう大型化して、世相やライフスタイルの変化を反映したトイレに変身中だという。

平成 15 (2003) 年 3 月 14 日、朝日新聞貼付の「朝日ぐんま」にこんな記事がトップニュースとして載っていた。“臭い、汚いにサヨナラ変わる学校トイレ”改革に着手する群馬県太田市。トイレ改修の発案者は、清水聖義太田市長とある。

市長は以前から学校のトイレの現状について気にかけていたという。トイレは学校を体現しているトイレを見ればその学校がわかるという。このままでは、生徒が積極的に掃除する気にならない。清水市長と私は同級生で、同じ小学校の汚い便所を経験し、その思いを共有していたのかなと思った。

平成 14 (2002) 年の夏、市長は市内の学校に出かけ生徒たちとトイレ会談を開いて子供たちの要望を把握した上でトイレ改革がスタートした。

設計は市内の民間業者に依頼、今までの学校トイレの概念にとらわれない自由な発想を吹きこんだデザインになったという。ウォッシュレット、擬音装置に、自動手洗い、シックな照明が設置され明るく楽しいがコンセプト、ちょっと遊び心も入れてみた 10 年、20 年後の後輩のことも考えて大切に使って欲しいという。

“トイレを綺麗にすると学校が変わる”という本が出た。とにかく厄介者扱いされるトイレ。荒れていた滋賀県栗東市の三つの中学校は、計画段階からトイレの前面改修に生徒を参画させることで学校の再生を果たしたと同市教育長の著者がそのドキュメントを描いている。

アーノルド・トインビーによると、決定権を持っていないと感じたとき、その人は帰属意識を失い、組織は崩壊するという。学校のトイレ改修への生徒参加は正義感や公共性、責任感をはぐくむ「心の教育」だと著者は説いている。

「自分たちの、自分たちのための、自分たちによるトイレ」だという認識こそが生徒の自主性を育てると指摘している。トイレは教育の場でも重要な役割があったのである。

## <余談>

▼広島県尾道市にある中堅企業（従業員 3,500 人）の社長鍵山秀三郎氏は毎日自らトイレ掃除を行っているという。社長はトイレ掃除にゴム手袋などしていない。素手で掃除をするから意味があるのだという。

便器は社長の手にかかると隅々までピカピカに磨き上げられる。ゴム手袋などしてはまことのトイレ掃除（仕事の真髄）に迫れないという考えからだと言っている。この考え方に社員も感化していき会社の活性化につながったというからすごい。

社長は“トイレ掃除で日本が変わる”と自らの考え方を講演会でしているという。この考え方が広島県全体に広がっていき暴走族対策にもこの考え方を持ち込んで大成功を収めたという。まさに教育も仕事もやる気を起こさせるのもその人の心をどう動かすかにかかっているといえる。その教育の場それがトイレ掃除なのであるという。

▼全国に 2 施設だけの「縁切り寺」の一つ太田市徳川町の「満徳寺・資料館」が大晦日と正月 3 日間「縁切り・縁結び廁」を開放するという。

今年一年の悪い縁を特性の紙に書いて水洗トイレに流す一方、福縁を呼び込むための縁結びも流し新しい一年をスタートさせるという趣向のサービスをしているという。

▼米国人女性が、留学生向けの情報ブログ『RYUGAKUSEI TOWN』で、日本のトイレについて綴った。そのブログ（編集担当：佐藤あきこ・山口幸治）を転載する。

**【米国ブログ】日本のトイレ「和式は困惑、ハイテク版は恐る恐る」**

筆者はまず、日本のトイレには「伝統的なスクワットタイプ」のトイレと、「驚異のハイテクタイプ」である温水洗浄便座の 2 種類がある紹介している。前者は和式トイレの事を指しており、「しゃがむスタイルのトイレは、ひょっとしたら健康にはよいかもしれないが、落ち着かない」と述べた。欧米人の多くが「しゃがむ」姿勢を苦手としていることから、和式トイレの使いにくさは、特に印象に残っているのだろう。

一方で、多くのボタンでトイレの機能全てをコントロールできるハイテクトイレには驚きを隠せない様子だ。

ブログには最新式のトイレ用コントロールパネルの写真が掲載されているが、筆者は「日本のトイレに関する知識が浅い自分では、そのボタンの全ての使い方は説明できそうにないと」と断り、幾つかの基本的な機能を紹介した。

フラッシュボタンは日本だけのものではないが、日本ではほとんど全てのトイレに、「大」または「小」ボタンが標準装備されている点に着目。トイレを終えて流す際は、この「大」「小」2つの漢字を目印にすればよいとアドバイスした。

さらに筆者は、日本のトイレにはビデシステムが標準装備されており、多くの外国からの訪問者を魅了していると述べ、多くのボタンがその機能を表現する絵で示されていることから、日本語を読み解く必要はないとも語った。

また最初にビデ機能をを知ったときは、そのスプレーがトイレに溜まっている水から直接吹きかけるものと思ったと回顧し、初めて温水洗浄便座を目にした欧米人たちが同様に持つであろう疑問に対して、「もちろんそんなことはない」と説明した。

多くのトイレ機能の中でも、筆者がもっとも素晴らしいと感じるのが冬に使う「便座ウォーマ」だという。日本のトイレにはセントラルヒーティング機能がないため、トイレが凍えかねないからだとその理由を挙げた。また筆者は日本人が「トイレの音」を恥ずかしがる為に、大きな「フラッシュ風な音」を出す為のボタンがあることには、最も面白さを感じたと述べた。筆者は自分以外にも多くの米国人が、日本のトイレを話題として取り上げていると述べ、関心の高さに言及した。また筆者は、ハイテクトイレの機能の良さを認めつつも、「全てのパネルの機能を試す勇氣はない」と述べている。

日本人には今や馴染み深い温水洗浄便座だが、米国人が日本を訪れて初めてハイテクトイレを経験する際には、多くの人が恐る恐るパネルのボタンを押しているのかもしれない。

・トイレ考は、過去に纏めたものを加筆及び一部削除し再編集したものです。  
(2020/3/29・雪がこんこんと降る日に改記)